

ジャンルの概念に基づいた ESP 教材の応用¹

岩井千春

(大阪経済大学)

1. はじめに

ESP (English for Specific Purposes) は学習者の専門分野に焦点を当てた英語教育であり、ニーズ分析と並んで教材開発が積極的に研究されてきた。ESP 教材については、ESP 教員は、学習者の専門分野やニーズを考慮した教材の提供者であるべきであり、必ずしも、教材の開発者でなければならないということではない (Dudley-Evans & St. John, 1998)。言い換えれば、既存の教材を工夫して使うことができるのであれば、それも有効な選択肢の一つであるということである。そこで、本研究では、将来の職場でのオーラルコミュニケーションを目指した ESP 授業の為に、ジャンルの視点で ESP 教材の応用について議論する。また、教材を応用することにより、教育的にどのような意義があるのかについて実証的研究を行い、ESP 教育一般における教材の応用について示唆を導き出したい。

2. ジャンルと ESP 教材

2.1 ジャンルとは

本研究では、Swales (1990) のジャンルという概念からの視点を採用している。Swales によると、ジャンルとは、学習者が所属する社会的集団であるディスコース・コミュニティ (例えば、特定の学問分野や職業など) のコミュニケーション活動を推進する上で生まれ、その集団に独特な語彙を持つものであり、レジスターが目的によって特化された形であるという。即ち、ジャンルは、特定の社会的集団のコミュニケーションの目的に焦点が当てられているものである。具体的なジャンルの形としては、論文、会話、手紙、広告などの言語活動の様々な種類であり、それぞれ書き言葉、話し言葉の両方が含まれる (深山, 2000)。

また、Johns (1997) は、ジャンルとは、ジャンルを生み出したコミュニティの価値観、ニーズ、実践を示すものと述べている。同様に、Bhatia (1993) も、コミュニティの実践や経験とジャンルの関係について以下のように解説している。

It is the cumulative result of their long experience and/or training within the specialist community that shapes the genre and gives it a conventionalized internal structure. (Bhatia, 1993, p. 14)

更に、ESP 教育の実践では、ジャンルを分析してさまざまな教材や教授法に応用されている。本研究においても、ジャンルは教育実践の上で重要な概念として捉え、教育に応用している。

2.2 コミュニティのレベルとジャンルの共通性

ジャンルを生み出すコミュニティについて、Johns (1997) は、個々の専門家達のコミュニティが集まって、より大きく一般的なコミュニティを形成していると考えられる。即ち、人は、その専門性が進んでいくと、より専門化されたコミュニティに入っていく。Johns の医師の集団の例では、医師の中には、細分化された（例えば）外科医のコミュニティがあり、その中には、更に細分化された神経外科医のコミュニティがある。医師は全て専門家になる前に基本的な教育を受けている為、ほとんどの医師に共通する価値観や概念を共有している。そのより一般的なコミュニティでは、それぞれの専門分野が共通して理解し、利用することのできる、出版物、文書、概念、言語、価値観などがある。これらはジャンルを構成するが、専門性が高まるとそれぞれの専門化された分野でのジャンルの要素にもなるという。

ESP 教育では、人々の社会的集団の言語使用に焦点を当てて議論する為、ディスコース・コミュニティという概念を使用しているが、これは、前節で述べたように各分野の専門家集団である為、Johns (1997) のコミュニティの概念と同様と考えられる。従って、Johns は ESP 教育におけるディスコース・コミュニティを様々なレベルで捉える視点を提供しており、更に、ディスコース・コミュニティのレベルとそれに応じてジャンルのレベルが生まれると述べている。

2.3 ESP 教材と学習者の専門性

前節で示したディスコース・コミュニティのレベルという観点で考えると、専門性が進んでいない段階（低い年次の学部生）では、ディスコース・コミュニティとの関りも一般的なレベルと考えられる。即ち、ディスコース・コミュニティでの英語使用についても、一般的な英語に近い言語的特徴のレベルでのみ可能となるであろう。そして、学習者の年次が上がっていくにつれ、専門性も高くなり、要求され、且つ、使用可能な英語技能もより専門的となる。言い換えれば、学習者がディスコース・コミュニティ内での専門性が高くなるにつれ、活用できるジャンルもより専門的な言語的特徴を持ったものになっていく。従って、ESP の教育実践においても、例えば、学習者の年次が低く、その専門教育があまり進んでいない段階であれば、それに応じたより一般的なレベルで、より一般的なジャンルの教材が相応しいと考えられる。しかしながら、既存の教材の中から、様々なレベルの学生に対して、それぞれに相応しいジャンルを扱った教材を探すことは難しい場合がある。特に、今回の授業の対象者ような管理栄養士分野の場合、既存の教材は極めて限られた種類のものしかなく、その中で担当する学習者の為の教材を探すことは困難であった。

そこで、コミュニティのレベルとジャンルの共通性を考えると、より一般的に捉えたコミュニティの中で、その中のより専門化されたコミュニティの為の ESP 教材を他の分野の ESP 教育に応用できるのではないかと考えた。即ち、広く捉えたコミュニティの中には、その中のより専門化されたコミュニティの間で共通する価値観、概念、言語使用などがあり、それらの共通する言語的要素をある分野の教材から取り出し、教育に応用するという視点である。

次節からは、筆者が実際に担当した授業で行った、教材の応用の方法について述べる。

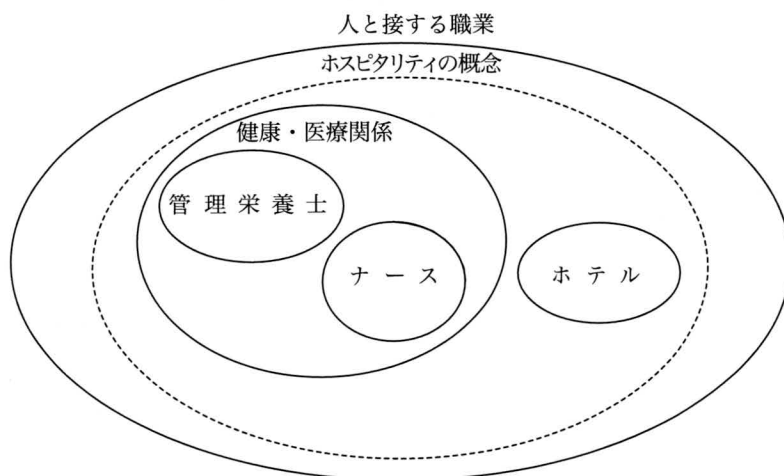
3. 教材の応用

3.1 学習者と授業について

本研究の対象となった授業は、筆者が非常勤職員として実施したある大学の管理栄養士養成課程の二年次生（229名）のものである。学習者の専門性はまだ低い為、英語の専門性についても一般英語に近い ESP 授業と位置づけた。授業の目的は、管理栄養士としての栄養指導などを目指したオーラルコミュニケーションスキルの養成である。

3.2 教材の選択

2で議論したように、教材の選択にあたっては、より大きく捉えた一般的なコミュニティの中での別の分野の教材を応用することを考えた。学生は、管理栄養士課程に在籍している職業意識の明確な学生であり、職業や社会への視野を持っている為、そういった分野に興味を持ちやすいと考え、職業分野の ESP 教材から、ホテルスタッフとナースの為の教材を選択した。



(図1) 管理栄養士とその関連するコミュニティ

管理栄養士とナースは共にチーム医療のメンバーとして専門的にも近い分野であり、職場も病院などで共通する場合が多く、医療に関連する同じ概念や専門用語などを共有していると考えられる。また、ホテルスタッフと管理栄養士やナースのような医療関係者は、全て人と接する職業であり、特にホスピタリティ（人を温かくもてなす心）²の概念を共有していると考えられる。(図1) 語源的にも、hotelとhospital、そして、hospitalityは互いに共通するラテン語の語彙³で、「人をもてなす」という意味の語から派生している。hospital(病院)も、元々は「人をもてなす場所」から「病気や怪我人を癒す場所」である病院という意味になったことから、これら3語は語源的な共通性がある上に、人を温かく迎えるという共通の概念を持っている。

このように、管理栄養士とホテルスタッフ、そして、ナースには共通する概念や価値観がある為、それぞれの分野の言語使用のジャンルには、共通性を反映した要素があると判断し、それらの ESP 教材を授業に応用することとした。

3.3 応用の方法

ナース、ホテルスタッフの ESP 教材から、それぞれのオーラルコミュニケーションのジャンルと管理栄養士に必要なオーラルコミュニケーションのジャンルに共通する要素に限定して取り出し、授業での ESP 教育に応用した。(各教材共に、それぞれの専門に特化した内容も当然含まれていたが、授業ではより一般的で管理栄養士としても必要な表現に限定して応用した。)各教材共に 30 分程度を 2 回の授業に分け (各教材毎に合計 1 時間程度)、応用した。ナース、ホテルスタッフの ESP 教材共に、職場で必要とされる実践的な英語の会話表現を扱い、学習しやすいように基礎的なものから構成されており、応用する部分を選択しやすい教材であった。

(1) ナースの ESP 教材⁴

応用した教材は、病院での患者とナースの会話を中心にしたものであり、ナースへのニーズ分析に基づいて製作された実践的な教材である。管理栄養士にも共通し、応用して使用できるような表現や語彙を取り上げた。(表 1) 授業では、表現の文法的な構造や、発音の注意点(イントネーション、アクセントや、間違いやすい発音など)を指摘する一方で、こういったシチュエーションでこれを管理栄養士としても使用可能であるかを解説し、学習者により身近に感じられるよう指導した。

(表 1) ナースの ESP 教材から取り上げた項目と例文 (一例)

「病院のシステムやサービスの案内、一般的な表現」(p.7)

“Breakfast is served at 8, lunch at noon, and supper at 5.”

“Please return the tray to the wagon.”

“May I come in?”

“I’ll come back soon.”

「病院食の語彙」(p.35)

“liquid diet”, “tube feeding”, “diabetic diet”

「食事習慣などの表現」(p.13)

“How is your appetite?”

“Are you allergic to any food?”

“How much alcohol do you drink in a day?”

“Do you eat snacks between meals?”

「励ましの表現」(p.73)

“Sure, you can.”

“It will be all right.”

“You will be fine soon.”

“I’m sure it will be successful.”

※ページ数は中西・野口・川越・仁平(2002)のページを示す

(2) ホテルの ESP 教材⁵

ホテル内の各職場でのニーズ分析に基づいて筆者が製作したビデオ教材であり、主な内容は、ホテルスタッフと外国人客との会話である。ビデオ教材はホテルの部門毎に 5 種類

あるが、本研究では、案内などより一般的な内容を多く含む「ベルサービス」部門の教材と、食事の表現を多く含む「レストラン」部門の教材を応用した。具体的な内容としては、適切な挨拶、丁寧な表現、食事に関する表現などである。(表2) また、ビデオ教材という特徴から、登場人物の表情や態度などからも、アイコンタクトや笑顔などコミュニケーション上で重要な点を指導した。ナースの英語教材と同様に、文法事項や発音、管理栄養士との言語的共通性などについても指摘する一方で、ホテルの教材については、ホテルの英語表現を指導する際に、ホテルスタッフが心掛けている人への接し方(接客の基本的な心構え)についても解説し、管理栄養士にも応用できることを指導した。

(表2) ホテルの ESP ビデオ教材から取り上げた項目と例文(一例)

「挨拶」	“Good morning, Mr. Johnson.”
	“How are you this morning?”
「案内」	“I’ll show you to your room, sir.”
	“After you.”
	“This way, please.”
	“The emergency exit is at the end of the corridor.”
「食事、メニューの表現」	“Here you are.”
	“Enjoy your breakfast.”
	“Would you care for some dessert?”
	“Have you finished your meal?”
「感想を聞く」	“How is your dinner?”
	“How was your dinner?”
「その他の丁寧な表現」	“That’s very kind of you, sir.”
	“Is there anything else I can do for you?”
	“Excuse me.”

4. 調査方法と結果

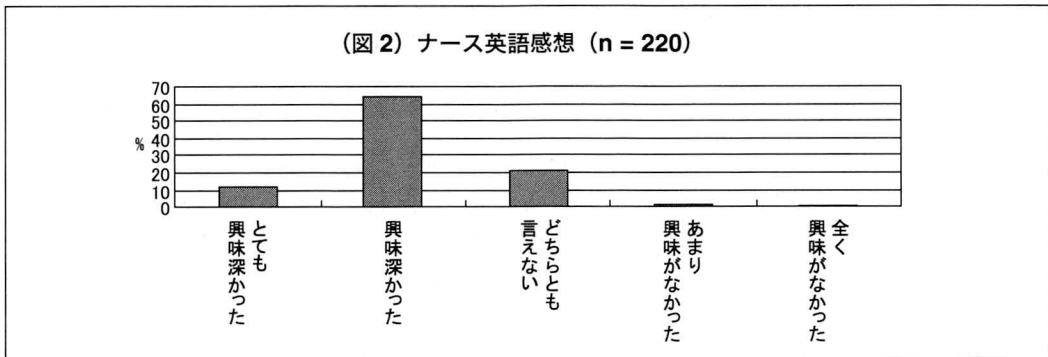
対象の授業では、学習者のニーズをフレキシブルに ESP 授業に反映する為、授業期間中4回(各10分程度)のアンケート調査を実施している。本研究では、それらのアンケート調査の質問項目から、学習者に各 ESP 教材の応用に関する質問を抽出し分析した。(有効回答数, n=220) 具体的には、1. 応用した各 ESP 教材の感想、2. 各教材が将来に役立つかどうかの意見、3. 教材を応用すること全体についての感想、であり、次に調査結果を示す。

(1) 応用した ESP 教材の感想

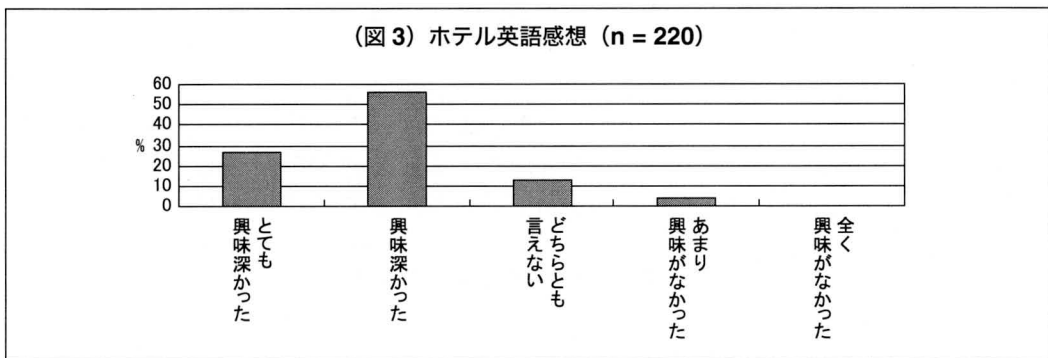
ナースとホテルスタッフ、各 ESP 教材についての感想を5択の選択肢(1. とても興味深かった、2. 興味深かった、3. どちらとも言えない、4. あまり興味がなかった、5. 全く興味がなかった)から選んで回答してもらい(図2、図3)、その理由を自由に記述してもらった。

「ナース英語感想」の回答の割合は、1. とても興味深かった(12.3%, 27名)、2. 興味深かった(64.0%, 141名)、3. どちらとも言えない(21.8%, 48名)、4. あまり興味がなかった

(1.4%, 3 名)、5. 全く興味がなかった (0.5%, 1 名) であり、全ての回答の平均値は 2.14 であった。



一方、「ホテル英語感想」の回答の割合は、1. とても興味深かった (26.8%, 59 名)、2. 興味深かった (55.5%, 122 名)、3. どちらとも言えない (13.2%, 29 名)、4. あまり興味がなかった (4.5%, 10 名)、5. 全く興味がなかった (0%, 0 名) であり、全ての回答の平均値は 1.95 であった。



また、「ナース英語感想」と「ホテル英語感想」について選択肢を選んだ理由の自由回答については、二つ以上の理由を含む場合もあるので、複数回答扱いとしてカテゴリー化した。以下に 10 名以上の回答があったカテゴリーを挙げる。

「ナース英語感想」回答選択の理由

- 管理栄養士にも使える英語、役立つ (27.7%, 61 名)
- ナースの表現、語彙など勉強になった (16.4%, 36 名)
- 病院で勤務するかもしれない (8.2%, 18 名)

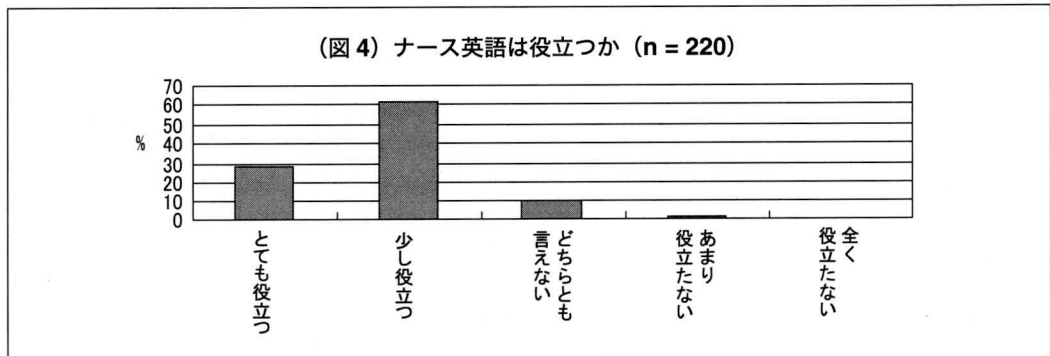
「ホテル英語感想」回答選択の理由

- 英会話、外国旅行など、一般的に役に立つ (18.6%, 41 名)
- マナー、丁寧な表現、表情が勉強になった (17.3%, 38 名)
- 映像が分かりやすい、ビデオが良い (13.2%, 29 名)
- 興味深い、面白い、楽しい (8.1%, 18 名)
- 接客の応対が勉強になった、アルバイトで使える (6.8%, 15 名)

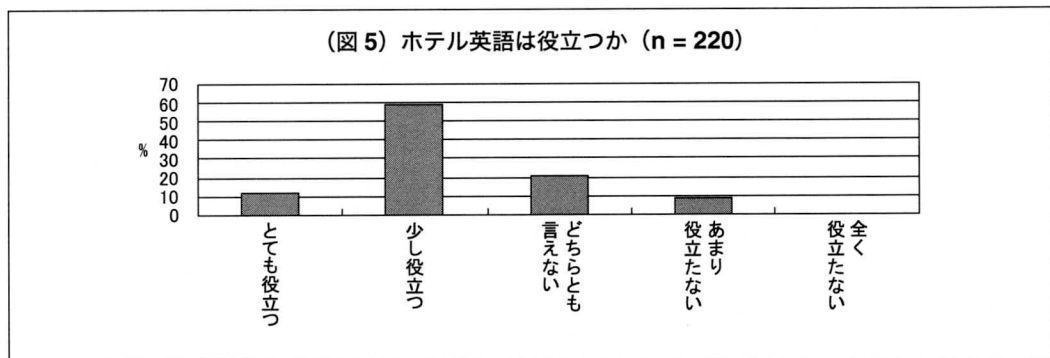
(2) 応用した ESP 教材は将来役に立つか

学習者にとって将来の仕事に役に立つ英語を教育するということが ESP の主な目的の一つである為、応用した ESP 教材について将来役に立つかどうかという質問をした。

この質問も前問と同様に、5 択の選択肢 (1. とても役立つ、2. 少し役立つ、3. どちらとも言えない、4. あまり役立たない 5. 全く役立たない) を用意し、その中から選んで回答してもらい (図 4、図 5)、その理由を自由に記述してもらった。「ナース英語は役立つか」の回答の割合は、1. とても役立つ (28.6%, 63 名)、2. 少し役立つ (61.4%, 135 名)、3. どちらとも言えない (9.1%, 20 名)、4. あまり役立たない (0.9%, 2 名)、5. 全く役立たない (0%, 0 名) であり、全ての回答の平均値は 1.82 であった。



一方、「ホテル英語は役立つか」の回答の割合は、1. とても役立つ (11.8%, 26 名)、2. 少し役立つ (59.1%, 130 名)、3. どちらとも言えない (20.5%, 45 名)、4. あまり役立たない (8.6%, 19 名)、5. 全く役立たない (0%, 0 名) であり、平均値は 2.26 であった。



また、前問と同様に、「ナース英語は役に立つか」と「ホテル英語は役に立つか」について選択肢を選んだ理由の自由回答について、複数回答扱いとしてカテゴリー化し、10 名以上の回答があったカテゴリーを以下に挙げる。

「ナース英語は役立つか」回答選択の理由

- 管理栄養士にも共通する英語、役立つ (28.6%, 63 名)
- 病院に勤務すれば役に立つ (11.8%, 26 名)
- 外国人に接する時に広く役に立つ (10.0%, 22 名)
- 知っているのと役に立つ知識 (5.0% 11 名)

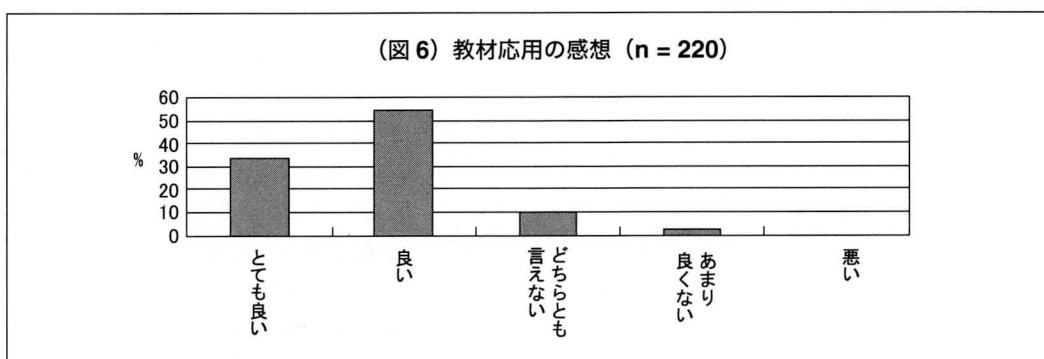
「ホテル英語は役立つか」回答選択の理由

- 丁寧な表現、マナー、人への接し方が役に立つ (31.4%, 69 名)
- 管理栄養士と仕事内容や表現が共通する (22.7%, 50 名)
- 管理栄養士とホテルの関連性が薄い (12.7%, 28 名)
- 外国人に接する時に広く役に立つ (8.2%, 18 名)

(3) 授業に他分野の教材を応用することへの感想

この質問も、5 択の選択肢 (1. とても良い、2. 良い、3. どちらとも言えない、4. あまり良くない、5. 悪い) から選んで回答し (図 6)、その理由を自由に記述する形式である。

「教材応用の感想」の回答の割合は、とても良い (33.2%, 73 名)、良い (54.0%, 119 名)、どちらとも言えない (10.5%, 23 名)、あまり良くない (2.3%, 5 名)、悪い (0%, 0 名) であり、平均値は 1.82 となった。



また、同様に、「教材応用の感想」について選択肢を選んだ理由の自由回答について、複数回答扱いとしてカテゴリー化し、10 名以上の回答があったカテゴリーを以下に挙げる。

「教材応用の感想」回答の理由

- 視野が広がる、社会勉強、幅広い知識を身につけられる (25.0%, 55 名)
- 将来活用できる、役に立つ (13.2%, 29 名)
- 楽しい、面白い (13.2%, 29 名)
- 管理栄養士と共通性がある (11.4%, 25 名)

5. 考察

本節では、応用したそれぞれの ESP 教材に特徴的な結果について、統計的な分析も加えながら考察を述べたい。

(1) ナースの英語教材

管理栄養士は病院で働く可能性も高い為、ナースとは病院という職場の共通性が学習者達には比較的強く認識されていた。それは、「ナース英語感想」や「ナース英語は役立つか」という質問に対して、「病院に勤務するかも知れない」や、「病院に勤務すれば役に立つ」という回答理由が多いことから考えられる。また、病院での医者・ナース・管理栄養士などとのチーム医療の概念が学習者に定着しており、そのことが、ナース英語と管理栄養士に必要な英語との共通性が見出されるきっかけとなったことが考えられる。

ナースの英語教材は、将来役に立つという感想が多かった為、「ナース英語は役立つか」の平均値 (1.82) と「ホテル英語は役立つか」の平均値 (2.26) を比較する⁶と、有意な差 (t検定による: $t=-8.668$, $d.f.=219$, $p<0.01$) があった。即ち、学習者は、ホテル英語に比べ、ナース英語の方がより役に立つと考えていることを示唆している。

(2) ホテルの英語教材

「ホテル英語は役立つか」の質問に対する回答選択の理由に、「丁寧な表現、マナー、人への接し方が役に立つ」という回答が多かったことから、ホテルの英語教材からマナーについて学んでいたと考えられる。筆者が教材を応用する前に同じ学習者に行ったアンケート調査では、「ホテルスタッフに求められる資質⁷」の質問に、礼儀正しさ (91.0%, 201名)、丁寧な言葉遣い (82.4%, 182名)、優しさ & 思いやり (68.8%, 152名)、状況判断能力 (67.4%, 149名)、明るさ (48.4%, 107名) が多い回答であった (最多回答5位まで、複数回答、 $n=221$)。即ち、学習者の多くが「ホテルスタッフは礼儀正しく、丁寧に話す」というイメージを持ち、ホテルで教育用に使用されていたこの教材からこのようなことが学べると少なからず期待していたことが考えられる。

更に、別の機会に行ったアンケート調査で、学習者の意識としてマナーに関するニーズを調査する為に、「マナーの話を知りたいか」という質問をしたが、その結果、1. もっと聞きたい (26.6%, 58名)、2. もう少し聞きたい (26.6%, 58名)、3.今のままで適当 (43.5%, 95名)、4. あまり聞きたくない (2.8%, 6名)、5. 全く聞きたくない (0.5%, 1名) であった ($n=218$, 平均値 2.24)。これは、筆者が授業の初めに、一般的なマナーの話を10分程度行っていることに対する意識を調べたものであり、この調査の結果から、マナーについて学ぶことについて学習者にニーズがあることが分かった。(実際にも、管理栄養士も患者など人に接する職業であり、社会人としてのマナーは必要である。)そして、この「マナーの話を知りたいか」と「ホテル英語の感想」の質問には有意な相関 ($p<0.01$, $r=0.259$ 、表3参照)があり、このことから、マナーの話に興味を示す学習者は、ホテル英語の感想に好意的に答える傾向があるということを示している。「マナーの話を知りたいか」と「ナース英語の感想」には有意な相関はない。表3参照)即ち、学習者達は、学習者は、ホテル教材とマナーの学習に関連性を認識し、ホテルのビデオ教材から、社会人として必要なマナー・丁寧な英語表現を学んだ可能性を示している。

また、「ホテル英語の感想」の質問に対する回答の理由の中で、「接客の応対が勉強になった、アルバイトで使える」(6.8%, 15名)という記述が比較的多かった。この結果は、筆者が事前に意図していたことではなかったが、ホテルの教材がアルバイトでの接客業務のニーズにも対応していたことを示している。3.2で述べたように、人に接する職業には共通する概念、価値観、言語表現が考えられる。このように、授業で取り上げる将来の仕事に必要な英語表現がアルバイトで必要とされる英語使用にも関連する場合、アルバイトでも使用可能であるということをESP授業の中で言及すれば、学習効果を高める上で有効ではないだろうか。「将来」という少し時間を置いたニーズよりも、「今日」必要かも知れないアルバイトでのニーズは、学習動機を高める上ではより強い働きをすることが考えられる。

一方で、「ホテル英語は役立つか」の回答理由には、ホテル英語と管理栄養士との関連性の薄さについて言及する意見もあった (12.7%, 28名)。この結果は、これらの回答者については、充分に関連性が認識されていないことが推察され、学習者に対して、教材の共通

性について充分指導する必要性を示している。しかしながら、それよりも多い学習者が「管理栄養士と仕事内容や表現が共通する」(22.7%, 50名)と述べていることや、マナーやその他の点について、ホテル英語を好意的に捉える言及がある為、ホテル英語の有用性は学習者に概ね認識されていたと考えても良いであろう。

また、「ナース英語の感想」の平均値(2.14)と「ホテル英語の感想」の平均値(1.95)には、有意な差(t検定による: $t=3.464$, $d.f.=219$, $p<0.01$)があり、ホテルのビデオ教材の方が、ナースの教材より興味深い、即ち、面白かったと考えられていたということを示唆している。本節の(1)で述べたように、ナース英語とホテル英語を比べると、「役に立つ」という認識はナース英語の方が高かった。通常は、役に立つと思えば、興味が増すはずであり、ナース英語の方が興味深いという感想の値が高くなることが予測できる。それにも拘らず、ホテル英語に対する興味の値が高くなったということは、ホテルのESP教材がビデオ教材であったことが一つの原因であったのではないかと考えられる。学習者の意見からも、「映像が分かりやすい、ビデオが良い」(13.2%, 29名)という意見があった。ビデオ教材による学習の効果については、Stapp(1998)も、重要な点がひと目で理解できることや、楽しく学習できることなどについて指摘しているが、ビデオという特徴が、学習動機に関連している可能性を示している。また、ホテルという分野が非日常的であり、また、自分たちの分野より少し距離のある分野の教材であることが(3.2の図1参照)、学習者に新鮮味を感じさせ、興味を引き起こした可能性も考えられる。

(3) 教材の応用について

「教材応用の感想」についての学習者の好意的な意見は、将来の職業に関連した別の職業ジャンルを学習することに意義を感じていることを示唆している。「視野が広がる、社会勉強、幅広い知識を身につけられる」(25.0%, 55名)という意見からもわかるように、応用した2つの教材は、両者ともにニーズ分析に基づいた実践的なESP教材であった為、学習者達が巣立って行く社会への興味を喚起し、学習動機を高めた可能性を示している。また、学習者達が、「楽しい、面白い」(13.2%, 29名)と言うように、テキストだけの単調なシラバスよりも、一部の時間でも他の教材を応用することは、学習者達を飽きさせず、授業に対する興味や関心を持続させる効果もあったのではないかと考える。

また、「将来活用できる、役に立つ」(13.2%, 29名)、「管理栄養士と共通性がある」(11.4%, 25名)という意見は、ホテルとナースの教材から、知識を応用することができていたことを示唆している。一見異なった分野の教材であっても、教員が手助けすることにより、「人に接する場合に必要な英語表現」として学習者が共通する部分を発見し、将来の英語使用の学習に応用することは、学習者が自律して学習していく為の訓練にもなると考える。

また、「ホテル英語の感想」と「ナース英語の感想」には有意な相関($p<0.01$, $r=0.401$ 、表3参照)があった。即ち、一方の教材に興味を持った学習者はもう一方の教材にも興味を示す傾向が見られるということである。

更に、ホテルとナースの各教材の感想と「教材応用の感想」にもそれぞれ有意な相関があった。「ナース英語の感想」と「教材応用の感想」($p<0.01$, $r=0.435$)、「ホテル英語の感想」と「教材応用の感想」($p<0.01$, $r=0.621$)表3参照)これは、各教材に興味を持った学習者は教材の応用にも好意的な感想を持つということを示しているが、本研究で注目したいのは、これら2つの相関の中でも、特に「ホテル英語の感想」と「教材応用の感想」の相関が強いということである。3.2の図1で見たように、管理栄養士、ナース、ホテルのコミュ

ニティの内、ホテルは管理栄養士とナースの医療関係者のコミュニティに属してはならず、より広い、一般的なコミュニティで管理栄養士と同じ概念や価値観を共有していると考えられる。即ち、管理栄養士から見て、ホテルはナースに比べてより遠いコミュニティに属しており、ホテル英語との共通性を認識するのが難しい可能性がある。そのホテルの教材に対する感想と「教材応用の感想」により強い相関が見られたということは、ナースに比べて一見あまり共通性がないと感じられるような分野（ホテル）の教材を応用して学習し、その有用性を認識することによって、より強く他分野の知識を応用することに意義を感じたと考えられる。このように、ナースとホテルの教材に対する感想を比較しても、知識を応用するという技術が訓練され、その効果が理解されていたことが推測できる。

(表3)⁸ 相関係数

		教材応用の感想	ホテル英語感想	ナース英語感想	マナー
教材応用の感想	Pearsonの相関係数	1.000	.621**	.435**	.233**
	有意確率(両側)	.	.000	.000	.001
	N	220	220	220	209
ホテル英語感想	Pearsonの相関係数	.621**	1.000	.401**	.259**
	有意確率(両側)	.000	.	.000	.000
	N	220	220	220	209
ナース英語感想	Pearsonの相関係数	.435**	.401**	1.000	.107
	有意確率(両側)	.000	.000	.	.124
	N	220	220	220	209
マナー	Pearsonの相関係数	.233**	.259**	.107	1.000
	有意確率(両側)	.001	.000	.124	.
	N	209	209	209	218

相関係数は1%水準で有意(両側)です。**.

6. おわりに

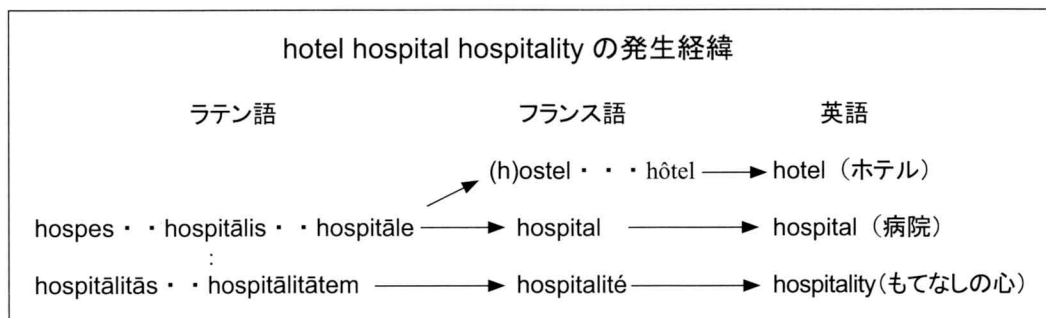
本研究では、ジャンルの概念に基づいて、他分野の教材から共通する部分を抽出し、教育に応用することの理論的枠組みと、実践方法、そして、教育上の意義について議論してきた。本研究は、学習者に関連する他分野の教材が学習者に歓迎されていたことを検証し、共通する部分を認識させることと、ニーズ分析に基づいた実践的な教材の内容が学習動機を高める可能性を示唆していた。ESP教育において、学習者のニーズに沿った教材を開発することは非常に重要であるが、教材を一から開発することは教員にとって負担が大きい。本研究のように、学習者の動機づけを高めることができるのであれば、他分野の教材を応用することは教員にとって現実的な方法であると言えよう。更に、対象の授業のような比較的一般英語に近いESP授業であれば、学習者が所属するコミュニティのレベルもより一般的なものとなり、応用できる教材にも多様な選択肢の可能性が存在する。また、知識を応用して役立てる技術は、学習者ストラテジーや学習者自律の訓練の一助ともなる為、学習者が将来独り立ちし、職場などのコミュニティにおいて英語を使用して仕事をする為には重要な能力であると考えられる。

一方で、この他分野の教材を応用するというアプローチは、「専門分野に特化したESP」というイメージからは一見離れているように感じられるかも知れない。しかしながら、学

習者のコミュニティをより広く捉える場合、その中に存在する他の分野にも共通する概念や価値観や言語的特徴は存在する。従って、本研究で検証してきたように他分野の教材を応用することにより、学習者がその分野の教材と自分達の分野に共通する要素を認識し、学習することで、学習者の専門分野の英語 (ESP) を学ぶことができた。また、逆に、自分達の分野とは異なる要素も併せて発見することで、自分達の分野の英語をより明確に認識する手助けになることも考えられる。このように、「敢えて」他分野の教材を応用することは ESP 教育の一つの教授法となりうるであろう。その為に重要なのは、教員が学習者の専門分野のジャンルを詳しく分析していること、そして、他の分野にも視野を広げ、応用できる教材を発掘する姿勢を持っていることではないだろうか。ESP は Tailor-made の教育といわれているが (Dudley-Evans & St. John, 1998)、多様な Material の中で如何に工夫して Tailor するのか、その技量が重要なのであり、本研究のアプローチは、全ての ESP 教育に応用可能なものである。

注

- 1 本論文は、第 43 回 (2004 年度) 大学英語教育学会全国大会 (2004 年 9 月 5 日・中京大学) における口頭発表「ジャンルの概念に基づいた ESP 教材の応用」の内容に加筆、修正したものである。
- 2 *Dictionary of travel, tourism and hospitality*(3rd ed.) では、hospitality は、「多くの人々により様々な意味で使われるが、近年は、特に商業上で宿泊と飲食サービスの提供を意味する」と定義されている。しかし、*Oxford Dictionary of English* (2nd ed.) によると、hospitality は、“the friendly and generous reception and entertainment of guests, visitors, or strangers” と定義されている。本研究では、語源的な共通性もふまえ比較的狭い意味で使用しているが、広い意味では、人と接する職業全てに共通する概念として捉えることもできる。
- 3 『英語語源辞典』(寺澤 1997) によると、英語の hotel は hospital と共に、ラテン語の hospes (「客、主人役、見知らぬ人」という名詞) が起源である。この語から派生した hospitalis (「客を厚遇する」という形容詞) が中世ラテン語 (600 ~ 1500 年) の時代に形容詞の中性形 hospitale が名詞になり (「簡易宿泊所」という名詞)、古フランス語でこの語から発達した (h)ostel が、フランス語の hôtel となり、それから英語の hotel に借用された。現代英語の hotel は、1600 年代頃まではフランス語法の「個人の邸宅」などを意味していたが、1700 年代後半になって現代の「旅館・ホテル」を意味するようになった。一方、hospital は、中世ラテン語の hospitale から、古フランス語 (800 ~ 1550 年) の hospital (「病院」という名詞) を経て、中世英語 (1100 ~ 1500 年) の時代に hospital として借入された。hospital は 1300 年頃以前は、巡礼者・旅人などの宿泊所を意味し、1300 年頃には貧困者を収容する救貧院を意味し、やがて 1500 年代に現代と同じ病院という意味になった。hospitality (ホスピタリティ) はラテン語の hospitalis から派生した hospitalitās (「歓待」という意味の名詞) の対格である hospitalitatem から古フランス語の hospitalité を経て、中世英語の hospitalite に借入されて、やがて現代英語の hospitality になった。



- 4 中西睦子監修、野口ジュディー・川越栄子・仁平雅子著 (2002) 『耳から学ぶ楽しいナース英語』 講談社サイエンティフィック
- 5 筆者が製作した企業内 ESP 教育のビデオ教材 (岩井, 2005)。「フロント編」「ベルサービス編」「ハウスキーピング編」「レストラン編」「喫茶編」の5種類 (各30分前後)がある。
- 6 アンケート調査の選択肢は、1「とても役立つ」から5「全く役立たない」までの5段階となっており、数値が小さいほど役立つと考えられていることを示す。(4節を参照) 本論文中で述べる平均値については全て同様である。
- 7 同様の質問で、「管理栄養士に求められる資質」についての結果 (最多回答5位, 複数回答, n = 222) は、正確な知識・技術 (97.3%, 216人)、状況判断能力 (78.4%, 174人)、優しさ & 思いやり (75.2%, 167人)、親しみやすさ (46.4%, 103人)、柔軟性 (45.0%, 100人)であった。
- 8 表の出力は、SPSS10.0J for Windows (Base System) による。

参考文献

- Bhatia, V. K. (1993). *Analysing genre: Language use in professional settings*. London: Longman.
- Dudley Evans, T. & St John, M. J. (1998). *Developments in English for specific purposes: A multi disciplinary approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岩井千春. (2005). 「企業内英語教育の実践に関する一考察—ESPのニーズ分析の観点から—」『LET 関西支部研究集録第10号』外国語教育メディア学会関西支部. 45-58.
- Johns, A. M. (1997). *Text, role, and context: Developing academic literacies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Medlik, S. (2003). *Dictionary of travel, tourism and hospitality (3rd ed.)*. Oxford: Butterworth-Heinemann.
- 深山晶子. (編) (2000). 『ESPの理論と実践—これで日本の英語教育が変わる—』三修社.
- 中西睦子・野口ジュディー・川越栄子・仁平雅子. (2002). 『耳から学ぶ楽しいナース英語』講談社サイエンティフィック.
- Stapp, Y. F. (1998). Instructor employer collaboration: A model for technical workplace English. *English for Specific Purposes* 17, 169-182.
- Swales, J. M. (1990). *Genre Analysis: English in academic and research settings*. New York: Cambridge University Press.
- 寺澤芳雄. (編) (1997). 『英語語源辞典』研究社.